

進路選択に関する語りにみられる「個」と「関係性」 からみた青年期のアイデンティティ様態の特徴

山田みき

(2008年10月2日受理)

Characteristics of Identity Status in Adolescence Classified by Individuality and Relatedness in Narratives about Making a Career Choice.

Miki Yamada

Abstract: Features of identity status, classified by individuality and relatedness were investigated. Semi-structured interviews containing questions related to making a career choice were conducted with 23 participants who were classified into one of four status groups; maturity, relatedness dominance, individuality dominance and immaturity. The main results were as follows; (1) The process of making a career choice was consisted of 11 variables; a) "Active commitment", b) "Stagnation", c) "Analysis of self", d) "Low commitment", e) "Breadth of horizon", f) "Respect for initiative", g) "Trust of self", h) "Tenacity of ego", i) "Trust of others", j) "Influence of others", k) "Confirmation", (2) "Respect of initiative", "Trust of others" and "Confirmation" were closely related to maturity status, (3) "Low commitment" and "Influence from others" were not observed in maturity status, (4) "Tenacity of ego" was closely related to individuality dominance and immaturity status. Results suggest that differences in the making a career choice were related to a status which adolescence belong to.

Key words: identity, individuality, relatedness, making a career choice, adolescence

キーワード：アイデンティティ、個、関係性、進路選択、青年期

問 題

アイデンティティ概念と実証的研究の流れ

アイデンティティとは、Erikson (1950 仁科訳 1977) により提唱された、人間の心理-社会的発達を表す概念であり、“自己の単一性・連続性・斉一性・独自性の感覚” (小此木, 2002) を意味する。Erikson (1950) は、8つの段階から構成される精神分析的個体発達分化の図式を提出し、アイデンティティの確立

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：岡本祐子 (主任指導教員)、兒玉憲一、前田健一

を青年期の課題として位置づけた。

アイデンティティに関する研究は、1950年代から現在まで、主に発達心理学や臨床心理学の分野で行われ、膨大な知見が積み重ねられてきた (鍾・宮下・岡本, 1995a, b, 1997, 1998, 1999; 鍾・岡本・宮下, 2002)。こうした研究の多くは、アイデンティティの確立が課題とされる青年期を対象にして行われてきた。しかし、近年では、女性の社会進出や少子高齢化などの社会の急速な変容を背景に、ライフサイクル全体を視野に入れて、アイデンティティ発達を捉え直すことの必要性が指摘されている (岡本, 1994, 1997)。

ライフサイクルの視座からのアイデンティティ研究

ライフサイクル全体を視野に入れたアイデンティティ研究では、成人期や老年期など青年期以降の発達

段階や女性の発達に焦点が当てられている。

成人期を対象とした研究では、例えば、岡本（1997, 2007）は、成人期のアイデンティティを捉える際、「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」の2つの視点の導入が必要であると示し、「個」と「関係性」から成人期のアイデンティティを捉える理論的枠組みを提示した。なお、ここでの関係性の概念は、次に述べる女性のアイデンティティ発達に関する知見から生み出されたものである。

女性のアイデンティティについての初期の研究（Gilligan, 1982 岩男監訳 1986; Josselson, 1973など）では、女性のアイデンティティ発達は男性とは異なり、他者との関係の中で進むこと、そのため、アイデンティティを捉える際に、関係性の視点が不可欠であることが示された。その結果、当初、アイデンティティにおける関係性とは、女性に特有の要素として位置づけられた。しかし、その後、アイデンティティ発達の性差の検討（Hodgson & Fisher, 1979; 高橋, 1988など）や成人期を対象にした検討など、アイデンティティにおける関係性の検討が進められ、男女に関わらず、関係性の視点からアイデンティティ発達を捉えることの重要性が指摘されるようになった。つまり、最近では、関係性は男女ともにアイデンティティ発達の基盤にあるものとして捉えられるようになってきている。

“Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線 (two-path) モデル”

アイデンティティを「個」と「関係性」の視点から捉えることを試みた理論の代表的なものとして、Franz & White(1985)の“Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線 (two-path) モデル”がある (Figure 1)。

Franz & White(1985)は、アイデンティティ発達にアタッチメントの視点を加える必要があるとし、アイデンティティ発達におけるアタッチメントの先駆的プロセスの精緻化を行った。最終的に、Erikson の図式を改良し、個体化経路とアタッチメント経路からアイデンティティ発達を捉えるモデルを提出した。

Erikson の提唱した課題のうち、親密性と世代性はアタッチメント経路に組み込まれ、アタッチメント経路の他の段階の課題と、個体化経路の成人前期と成人中期の課題が新たに設定されている。この研究では、これら2つの経路は“独立してはいるが相互に関係を持つ”要素であり、“より糸”と表現されている。

新たに想定された“アタッチメント経路”の発達は、信頼に始まり（乳児期）、自他の恒常性を獲得し（幼児前期）、他者を心理的に独立した存在として認知できるようになり（幼児後期）、さらに、他者を自律的で相互依存的関係をもつ存在としてみることができるようになり（学童期）、青年期の“相互性・相互依存”に至る。この時期には、他者との相互関係を円滑に進める種々の能力を獲得し、自己と他者の両方の感情に配慮して行動を起こすことができるとされる。そして相互関係を築くことが可能になることが、成人前期の親密性や成人中期の世代性という、他者との新たな形の関係の基礎になると述べられている。

Erikson が、発達における他者や社会との関係を重視しながらも、これまで十分記述し得なかった側面、つまり、他者との関係の中で個人が培う関係性に関わる特質や能力を明確化した点で、この論考は評価される。これはまた、アイデンティティ論に関係性の観点を加え、より臨床心理学的にアイデンティティ概念を扱う一助にもなりうる。彼女らの試みは、これまで実証的な検討はなされていないものの、今後のアイデンティティ研究に新たな展開を生む重要な研究と考えられる。

山田・岡本(2008)は、Franz & White(1985)を実証的に検討するために、この理論に基づいた尺度の作成を試みた。“個体化経路”の課題を参考に作成された「個」を測定する尺度（以下、「個」尺度）と、“アタッチメント経路”の課題を参考に作成された「関係性」を測定する尺度（以下、「関係性」尺度）が構成され、信頼性と妥当性が確認された。また、尺度の下位因子得点を用いて、対象者を4つの様態（成熟群, 「関係性」

	乳児期	幼児前期	幼児後期	学童期	青年期	成人前期	成人中期	老年期
個体化経路	信頼 対 不信	自律性 対 恥と疑惑	自発性 対 罪悪感	勤勉性 対 劣等感	アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散	職業及び ライフ・スタイルの模索 対 漂流	ライフ・スタイルの確立 対 空虚	統合性 対 絶望
アタッチメント経路	信頼 対 不信	対象及び 自己の恒常性 対 孤独と無力感	遊戯性 対 受身性 または 攻撃性	共感と協力 対 過度の警戒または 圧力	相互性・相互依存 対 疎外	親密性 対 孤立	世代性 対 自己陶醉	統合性 対 絶望

Figure 1. Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線 (two-path) モデル (鐘他, 1998, p.109, 図3-2)

優位群、「個」優位群、未熟群)に分類し、対人関係に関する語りを整理したところ、様態間で対人関係の在り方に相違が認められ、「個」と「関係性」の視点の有用性、すなわちその視点に基づいて作成された尺度の有用性が示された。しかし、面接調査の質問内容が対人関係に関するもののみであり、他の側面についても調査を行い、多角的に検討していく必要がある。そうした調査の積み重ねにより、山田・岡本(2008)で作成した尺度のさらなる検討と、見出された4様態のより詳細な検討、つまり「個」と「関係性」の視点の精緻化と有用性についての検討が望まれる。

アイデンティティ形成と進路選択

アイデンティティを実証的に捉えようとする際、多くの場合、Marcia(1966)のアイデンティティ・ステータス面接を始めとして、何らかの具体的事象に対する思考や取り組みから、対象者のアイデンティティの状態を理解しようとする方法が取られる。

青年期のアイデンティティを捉える際に用いられる具体的な事象には、職業、イデオロギー(宗教と政治)(Marcia, 1966)、友情とデート(Grotevant, Thorbecke, & Meyer, 1982)などがある。本邦においては、杉村(2001)が、青年期女子のアイデンティティについて「関係性」の視点から検討する中で、職業的な要因が、大学生のアイデンティティ形成にとって、重要な意味を持つと指摘している。ここでは、職業選択や就職活動のプロセスの中で、自己の振り返りが行われ、自己形成、つまりアイデンティティの形成が促進されると述べられている。また、進路選択過程には、個としての在り方と他者との関係が反映されることが予測され、「個」と「関係性」からアイデンティティを捉える際にも、有用であると考えられる。さらに、進路選択は、誰もが体験するテーマであり、アイデンティティ理解において、青年期、特に大学生を対象にする際には、適用範囲の広いテーマであると考えられる。

本研究の目的

本研究では、進路選択に関する語りを質的に分析し、「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティ様態の特徴を明らかにすることを目的とする。

具体的には、研究1で、山田・岡本(2008)と同様に、「個」尺度と「関係性」尺度の因子得点を用いて青年のアイデンティティ様態を分類する。次に、研究2において、研究1で得られた各様態について、山田・岡本(2008)では検討が不十分であった、「個」と「関係性」の両方を含む領域である、進路選択に関する対象者の語りを分析する。

研究 1

目的

山田・岡本(2008)と同様にして、「個」と「関係性」の視点から青年のアイデンティティ様態を分類する。

方法

対象者 男女大学生521名(男性155名、女性366名)、平均年齢20.2歳($SD = 1.56$)。有効回答率85.53%。

質問紙の構成 「個」尺度(山田・岡本(2008)の15項目、4件法)、「関係性」尺度(山田・岡本(2008)を改訂した13項目、4件法)、特性不安尺度(清水・今栄(1981)の20項目、4件法)、自尊感情尺度(山本・松井・山成(1982)の10項目、5件法)。特性不安尺度と自尊感情尺度は、分類した各様態の特徴を調べるために用いられた。

結果と考察

山田・岡本(2008)の因子分析の結果と同様に、対象者ごとに下位因子得点を算出し、それを標準得点化した値を用いて、非階層法によるクラスタ分析を行った。人数のばらつきやクラスタの解釈のしやすさの点から、山田・岡本(2008)と同様の4様態への分類を採用した(Figure 2)。

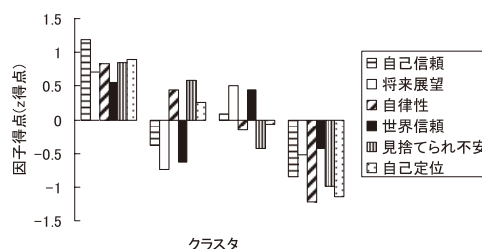


Figure 2. クラスタ分析の結果(左から、成熟群、「関係性」優位群、「個」優位群、未熟群)

クラスタは、下位因子得点のばらつきから、左から成熟群(108名)、「関係性」優位群(142名)、「個」優位群(165名)、未熟群(105名)と命名した。

次に、この4様態の特徴を明らかにするために、特性不安尺度と自尊感情尺度の合計得点を用いて、分散分析を行った。なお、本研究では、尺度数が多いため、2種類の質問紙を配布した。従って、特性不安と自尊感情の検討は、約半数の263名分のデータで行った。特性不安尺度得点の平均値と標準偏差は、成熟群 $M = 41.45$, $SD = 7.60$ 、「関係性」優位群 $M = 49.08$, $SD = 8.32$ 、「個」優位群 $M = 50.48$, $SD = 7.13$ 、未熟群 $M = 60.28$, $SD = 9.84$ であり、未熟群が最も高く、成熟群が最も低かった($F(3,259) = 53.52$, $p < .01$)。次に、自尊感情尺度得点の平均値と標準偏差は、成熟群 M

=38.56, $SD=4.89$, 「関係性」優位群 $M=30.97$, $SD=5.69$, 「個」優位群 $M=32.21$, $SD=75.80$, 未熟群 $M=24.65$, $SD=6.28$ であり, 成熟群が最も高く, 未熟群が最も低かった ($F(3,259)=55.07$, $p<.01$)。なお, 両得点とも, 「個」優位群と「関係性」優位群の間に有意差は認められなかった。

以上より, 「個」と「関係性」の視点から, 4つのアイデンティティ様態が得られ, それらの特徴が数量的に示された。特に成熟群と未熟群との間には, 特性不安と自尊感情の高低に大きな差が認められた。

なお, クラスタ分析の結果, 「個」尺度と「関係性」尺度の第3因子が, それぞれ「関係性」尺度, 「個」尺度の下位因子とまとまりを形成しており, 「個」と「関係性」の概念自体の理解やそれらの弁別性についても, 今後検討を進めていく必要があることが示唆された。

研究 2

目的

研究1で見出された4様態の特徴を, 進路選択に関する語りの質的な分析から明らかにする。

方法

対象者 研究1の対象者のうち, 面接調査への協力に応じた大学生23名(男性4名, 女性19名)。平均年齢20.5歳($SD=0.85$)。この23名は, Figure 1の4様態, 各5~6名であった。なお, 対象者と該当する様態全体との同質性を確認するために, 様態ごとに, 面接調査の対象者と, 様態内の他の対象者の因子得点の平均値を比較したところ, 有意差は認められなかった。

面接調査の手続き 1回50~90分の個別の半構造化面接を実施し, 全ての発言を録音した。調査時期は, 2008年1~4月であった。倫理的配慮として, 面接は第三者の立ち入る恐れのない個室で行い, 面接開始時には, プライバシーの保護や録音等について記載した同意書に署名を求めた。本研究は, 広島大学大学院教育学研究科の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

半構造化面接の質問項目 大学入学後の進路選択過程に関する3項目, ①現在考えている卒業後の進路, ②大学入学時に考えていた卒業後の進路, ③進路選択の経過を, 記載順に尋ねた。①と②については, 「どう考えていますか(いましたか)」と質問した後, ③については, 「経過を教えてください」と教示した後, しばらく自由に話してもらった。加えて, 適宜, 面接者の作成した面接マニュアルに基づいて, 語りを詳細化するための質問を行った。

結果の整理の手続き 調査実施後, 全ての対象者について逐語記録を作成した。①まず, 対象者ごとに,

進路選択の経過中の心理状態を表す語りを文章単位(1~3文程度)で抜き出した。②筆者を含む臨床心理士3名で, 小嶋(2004)や渡邊・岡本(2006), 川島(2008)のカテゴリ-生成法に倣い, 類似した語りをグルーピングしカテゴリ-化した。この時, 西條(2004)や大谷・無藤・サトウ(2005)が述べるように, 対象者が語る現象に“内在する意味を見出す”, つまり, どのような心理状態が語りに表れているかに着目した。なお, 類似したまとまりが他に見られないと判断された語りについては, いずれかのカテゴリ-に無理に当てはめることはせず, 少数であっても1つのカテゴリ-とした。③②の作業をもう一度繰り返し, ②のカテゴリ-を上位のカテゴリ-に集約した。ここでは, ②でグルーピングされた語りに共通する心理状態をカテゴリ-名とした。なお, ②, ③を通して, 常に逐語記録や抜き出した語りに戻り, それらを参照しながら作業を進めた。④③で得られたカテゴリ-を様態ごとに集計し, 様態間の比較を行った。⑤後日, 臨床心理学を専攻する大学院生2名に, ランダムに抽出した7割の語りが, 最終的に得られた11個のカテゴリ-のどれに該当するかの分類を依頼した。その結果, 一致率は79.7%であり, 分類の信頼性が確認された。なお, 分類が一致しなかった語りについては, 筆者と大学院生2名で協議し, いずれかのカテゴリ-に分類した。以降で示す結果は, 一致率算出後のものである。⑥小嶋(2004), 川島(2008), 前盛・岡本(2008)のプロセス分析の方法を参考に, 対象者ごとに, 抜き出した語りを該当するカテゴリ-に置き換え, 時系列に並べた。同じ様態の対象者のプロセスを重ねて, 各様態で80%以上の対象者が該当したカテゴリ-を中心に共通点を抽出し, 各様態の進路選択過程を示した。

結果と考察

抜き出した語りは, 成熟群110個, 「関係性」優位群101個, 「個」優位群94個, 未熟群109個, 計414個であった。第一段階のグルーピングの結果, 41個の下位カテゴリ-が得られ, 最終的には11個のカテゴリ-が得られた。11個のうち, 「停滞」と「自己分析」は, 全ての様態でほぼ全員が該当した。第一段階のカテゴリ-化の例を Table 1に, 最終的なカテゴリ-の定義と語りの例を Table 2に, 様態ごとのカテゴリ-の出現数を Table 3に示した。また, 各対象者の進路選択過程を Table 4に, 各様態の進路選択過程を Figure 3~Figure 6に示した。なお, 図中の二重線で囲まれたカテゴリ-は, 面接調査時点の対象者の心理状態が該当したカテゴリ-を示す。

なお, 本研究では, 各様態の特徴を, 他の様態との比較ではなく, その様態に多く見られたカテゴリ-か

Table 1 第一段階のカテゴリ化の例（最終的に「主体性の重視」にカテゴリ化された下位カテゴリ）

語り	特徴	下位カテゴリ
<p>・大学に来てからは、両親の考えとかはあまり私にとって重要ではないって言うか、一応養ってもらってるし、尊敬はしてるんですけど、一応私が決めたことだから、報告という感じ(D)。</p> <p>・自分がどうなりたいかで色々選択している(E)。</p>	<p>“自分”を意識し、自分の思いや志向性に沿って進路選択を行う。親など他者の存在や影響も意識しつつも、“自分”で決定することを重視している。</p>	主体性の重視
<p>・どんな働き方をしても、どんな生活送っても、やっぱり自分が求めるものとの程度合致していればそれでいいんじゃないかと思うようになって(E)。</p>	<p>進路を人生の中の1つとして位置づけ、どう生きたいかという次元で進路選択に取り組んでいる。人生に対する主体的な姿勢が見られる。</p>	人生の中での職業の位置づけ
<p>・アドバイスとか色々聞いて、考えて、それで自分でこうしようかなって考える(H)。</p> <p>・(母親は)整理は手伝ってくれる。結局、私は自分で決めた感じが残ってますね(J)。</p>	<p>他者に相談したり意見をもらったりすることを通して、最終的に自分で整理・決定する。選択を他者に任せるのではない。</p>	他者を通しての自己理解

注) 語りの文章末の()は、対象者を示すアルファベット。

Table 2 進路選択過程のカテゴリの定義と語りの内容

カテゴリ	定義	下位カテゴリと語りの内容
積極的な関与	<p>定めた目標に対し熱意を持ち、その実現に向けて取り組んでいる状態。</p>	<p>決意:絶対臨床心理士になるって思ってた。絶対、入ったらそのまま院行ってしまう(W)。熱意:やりたいことだったら、収入はいいやって思ってた(B)。実現への取り組み:教師の説得力っていうのは指導力だと思うので、院に行っても知識と技術を身につけて(C)。</p>
停滞	<p>現実に直面し、戸惑いや焦り、後悔などが生じ、進路選択のプロセスが一旦停止した状態。混乱や決めるのが怖いなど、足踏みの状態も含まれる。</p>	<p>戸惑い:入ってすぐは戸惑った。よく分からなくなった(O)。焦り:やらなきゃいけないことをできてないっていう不安と焦り(U)。決めるのが怖い:自分が選んでしまうと、厳しくなる(R)。興味と職業の乖離:面白いけど、自分の職業としては、興味が無い(L)。あきらめ:単位数が、どう考えても合わないし、無理かあとと思って(T)。混乱:あれもこれもなくなってしまって(H)。自信がない:それをいいと思ってやれる自信が私には無い(E)。後悔:なんで(ここに)来たんだろうって(Q)。現実的制約:できるだけ親に負担をかけたくない(D)。</p>
自己分析	<p>これまでの経験から、自分の性格や特徴を振り返り、進路・職業との照合を行う。</p>	<p>自己の振り返り:自分の知らない自分ができる。自分を発見(J)。適性への不安:カウンセラーっていう仕事に自分が耐えられるのか(H)。</p>
低自己関与	<p>進路選択に際し、自己の関与が低く、合理的な選択を志向し、将来展望は漠然としている状態。</p>	<p>消極的選択:トントン拍子でいろんなものが進んで行くんで、ああ流れてしまったっていう(G)。考えていない:サークルとか授業とかが、わーっててこ舞いで、全然将来のことについて考えてなくて(I)。漠然とした将来展望:漠然としたイメージしかなかった(M)。コミットできない:試験を受けてまでなるメリットが感じられず(L)。合理的判断:仕事の内容よりも、土日休みとか給料がいいとか、働く場所がいいとか、ということをも重視したい(L)。</p>
視野の広がり	<p>職業の種類や仕事の内容などに目を向け、知る。</p>	<p>視野の広がり:道は他にもいっぱいあるじゃないって考えるように(E)。</p>
主体性の重視	<p>進路選択に際し、主体的に選択しようとし、自分の主体的な判断を重視する。</p>	<p>主体性の尊重:自分の経験が一番の後押し(A)。人生の中での職業の位置づけ:別に職業だけが形じゃなくて、自分がどういう風に生活したいかっていう所に仕事を入れる(E)。他者を通しての自己理解:友達と話したら、友達の意見も聞いて、自分の中でも整理できる(P)。</p>
自己信頼	<p>自信を持って進路選択に取り組んでいる状態。</p>	<p>自己信頼:今から勉強すればできるっていう自信はあって(V)。</p>
私の固執	<p>進路選択において、自己を主張し、他者からの影響や他者に頼る気持ちは否認。</p>	<p>我を通す:押し切った気がします。結局、私が我を通した(W)。他者影響の否認:あの人に影響受けたなみたいなのは今はない(S)。親は頼らない:親の意見は無視してます(I)。</p>
他者信頼	<p>進路選択に関して、両親や友人、先生に対する支えられ感や見守られ感がある。</p>	<p>他者への信頼:先生や両親がいなかったら、私は多分道をそらせたと思う(C)。他者からの一押し:(友人の)一言で決心がついたというか(P)。見守られ、支えられ:支えてもらう、困った時に。自分のことを心配してくれている存在っていうことで、安心感がある(J)。</p>
他者からの影響	<p>被影響性が高く、進路選択に他者の意見や考えが取り入れられる。取り入れ方には、他者に依存する在り方や、他者との比較などもある。</p>	<p>流される:エントリーするだけしてみたらと言われて。ということで、とりあえずやってみた(G)。他者依存:友達がいないと、実行には移せなかったらうなって(K)。親に左右される:親が絶対的。私はどんなに納得してなくても、はい、分かりましたって、そのまま納めることしかできない(K)。他者との比較による焦り:どうしても比べてしまう。身近に、頑張ってみえる人がいるから、劣等感(M)。憧れ:あんな人になりたいっていう。ほんとにほんとの目標で(U)。</p>
確認	<p>自分が行った進路選択や決定に対し、揺り戻しや再吟味が生じ、それにより決心が固まり、自己関与が高まる。</p>	<p>再認識:やっぱり自分のやりたいことはこれなんだなと思って。それで決心がついた(P)。揺り戻し:やっぱり自分も心理学をやりたいと思ってるどころはあるんで、就職のことを考えていると、そっちの気持ちがあがられる。私もちょっと心理学やりたいけど、でも就職かなって(E)。再吟味:簡単に決めすぎたんじゃないか、安易だったんじゃないかと思う時はある(D)。</p>

注) 下位カテゴリと語りの内容欄の文章末の()は対象者を示すアルファベット。

Table 3 4つの様態ごとのカテゴリーの出現数

カテゴリー	下位カテゴリー	成熟群 (N=6)	「関係性」 優位群 (N=5)	「個」 優位群 (N=6)	未熟群 (N=6)
積極的な関与 (Active commitment: AC)	決意	4	3	3	5
	熟意	4	1	0	3
	実現への取り組み	1	0	1	0
	小計	5	3	4	5
停滞 (Stagnation: S)	戸惑い	0	2	2	2
	焦り	0	0	0	1
	決めるのが怖い	0	1	2	1
	興味と職業の乖離	0	2	1	1
	あきらめ	1	0	0	1
	混乱	1	3	0	1
	自信がない	4	1	0	4
	後悔	0	0	1	1
	現実的制約	3	1	1	1
	小計	5	5	5	6
自己分析 (Analysis of self: AS)	自己の振り返り	5	4	4	3
	適性への不安	1	5	2	2
	小計	5	5	5	5
低自己関与 (Low commitment: LC)	消極的選択	1	3	1	5
	考えていない	0	2	1	2
	漠然とした将来展望	1	3	6	4
	コミットできない	0	1	3	1
	合理的判断	0	1	3	1
小計	2	5	6	6	
視野の広がり (Breadth of horizon: BH)	視野の広がり	2	2	2	3
	主体性の重視 (Respect of initiative: RI)	5	1	2	0
主体性の 重視 (Respect of initiative: RI)	人生の中での職業の位置づけ	1	0	0	0
	他者を通しての自己理解	0	2	1	0
	小計	5	2	2	0
自己信頼 (Trust of self: TS)	自己信頼	3	1	2	1
	私の固執 (Tenacity of ego: TE)	我を通す	0	0	2
他者影響の否認		0	0	2	3
親は頼らない		1	1	1	4
小計		1	1	5	5
他者信頼 (Trust of others: TO)	他者への信頼	4	1	2	1
	他者からの一押し	0	1	1	0
	見守られ、支えられ	5	3	2	2
	小計	6	3	4	3
他者からの 影響 (Influence of others: IO)	流される	2	4	1	4
	他者依存	0	3	1	1
	親に左右される	1	2	1	3
	他者との比較による焦り	0	2	3	0
	憧れ	1	0	0	2
小計	3	5	5	5	
確認 (Confirmation: Con)	再認識	4	1	2	0
	揺り戻し	2	0	0	0
	再吟味	2	0	2	0
	小計	6	1	2	0

注) 太字の数字は、各様態の80%以上の対象者が該当したことを示す。

Table 4 各対象者の進路選択過程

対象者	過程
成熟群	A LC→AS/IO→S/TO→RI/Con
	B AC/TE→AS→S→RI/TS→AC/TO/Con
	C AC/RI→TO/IO→AC/AS/RI→TO/Con
	D LC→BH/TO/IO→RI→S/TS/Con
	E AC/TS→Con→S/AS→AC/AS/BH→RI/TO/Con
	F AC→TO/Con→S/TO→Con
「関係性」 優位群	G AC→BH→S/AS→LC/TO/IO→AC/S
	H AC→S/AS→LC→RI/TO/IO→S/LC/BH
	I LC→S/AS→IO→LC/TE
	J LC→IO→S/AS→RI/TS/TO/IO→AC/LC
	K LC→S/IO→AS→IO/Con
「個」 優位群	L AC→S/AS→LC→AS/TO/IO
	M LC→BH/IO→AC/TE→AS/TS/IO
	N LC→RI→TO/IO→S/TS/TE
	O AC/LC→S→Con→AS/BH/TO/IO→S/TE/Con
	P AC/LC→S→AS→RI/TE/TO→Con
	Q LC→A/AS→LC→AS/IO→LC/TE
	R AC/LC→S→BH/TO/IO→TE→S
未熟群	S LC→S→AS→LC/TE
	T AC→S→C/BH/IO→S/AS/LC
	U AC→S/LC→TE/IO→AC/AS
	V AC→LC→AS/TE/IO→TS→S
	W AC/TE/IO→LC/BH→AS→S/LC/TE/TO

注) AC: 積極的な関与, S: 停滞, AS: 自己分析, LC: 低自己関与, BH: 視野の広がり, RI: 主体性の重視, TS: 自己信頼, TE: 私の固執, TO: 他者信頼, IO: 他者からの影響, Con: 確認

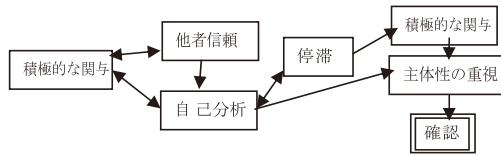


Figure 3. 成熟群の進路選択過程

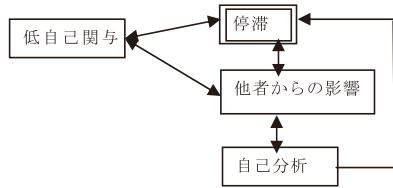


Figure 4. 「関係性」優位群の進路選択過程

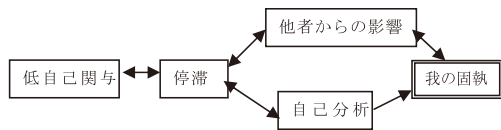


Figure 5. 「個」優位群の進路選択過程

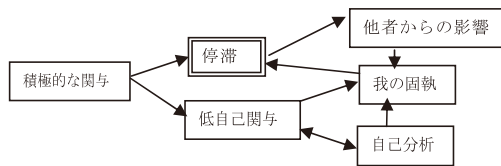


Figure 6. 未熟群の進路選択過程

ら検討した。従って、本研究で示唆された各様態の特徴は、その様態のみに見られる特徴とは限らない。また、様態間で同じカテゴリーが見られた場合も、進路選択過程のどの時点で見られるかに相違が認められた。

アイデンティティ様態「成熟群」の進路選択過程の語りの特徴 成熟群では、「積極的な関与」、「停滞」、「自己分析」、「主体性の重視」、「他者信頼」、「確認」に、6名中5名以上が該当した。全ての様態に見られた「停滞」、「自己分析」以外の、成熟群に特徴的であったカテゴリーについて考察する。以下、下位カテゴリーを<>で示す。

「積極的な関与」は、入学当初と進路選択を進めた後の2回見られた（未熟群では、入学当初に見られるのみであった）。成熟群の青年は、進路選択を進める中で、選択したものに対し、再度<決意>しく<熱意>を持って取り組むことが示唆された。「主体性の重視」は、他の様態ではほとんど該当者のいなかったカテゴリーである。成熟群の青年は、進路選択に対し自己の

関与が高く、自分の考えや志向性を重視しようとする在り方が示された。Erikson(1967 岩瀬訳 1982)は、青年は“人生の道の一つを、自由なる同意をもって意思決定する機会を求める”と述べており、「主体性の重視」は、従来から指摘されてきた青年期の様相と一致する特徴と考えられる。また、「自分がどうなりたいかで色々選択している」(対象者E)というような、できるかできないかではなく、したいかしたくないかという主体的な思考によって選択するという特徴は、若松(1991)においても指摘されており、大学生の進路選択に見られる特徴である。さらに、「主体性の重視」が多く見られたことは、研究1で示された成熟群の特徴である、自尊感情得点の高さと類似した傾向を示す。「他者信頼」は、成熟群のみで多く該当し、<他者への信頼>と<見守られ、支えられ>に多く該当した。進路選択において、他者を信頼し、自分が他者に支えられているという感覚を持っていることが示唆された。「確認」は、成熟群に特徴的に見られたカテゴリーである。成熟群の青年は、<再認識>や<揺り戻し>、<再吟味>を体験し、その時点までに自分が行った選択を「確認」することが示された。

進路選択過程を見ると (Figure 3), 入学当初の「積極的な関与」から、「他者信頼」に支えられながら「自己分析」を進め、「停滞」の時期を経て、再び「積極的な関与」へ、そして「主体性の重視」を経て、最終的に「確認」に至るプロセスが示唆された。成熟群に特徴的な「確認」に至るには、「主体性の重視」の状態を経ることが必要と考えられる。また、「主体性の重視」に至るには、「停滞」と行きつ戻りつしながら「自己分析」を進めることが重要であることが示唆された。

以上より、成熟群の青年は、主体性を持って進路選択にコミットし、模索の過程で自己分析を進め、同時に他者からの支えを感じ、選択の確認に至ることが示唆された。

アイデンティティ様態「関係性」優位群の進路選択過程の語りの特徴 「関係性」優位群では、「停滞」、「自己分析」、「低自己関与」、「他者からの影響」に5名中4名以上が該当した。全ての様態に見られた「停滞」、「自己分析」以外の、「関係性」優位群に特徴的であったカテゴリーを中心に考察する。

「低自己関与」では、5名全員が該当しているが、下位カテゴリーの該当者数はばらばらであった。「他者からの影響」も5名全ての対象者が該当した。<流される>に4名、<他者依存>に3名が該当し、進路選択において他者の意見に影響を受け、流されがちであること、また、流されるだけではなく他者に対して依存心を持つことが示唆された。他者からの影響を受け

やすいことに関しては、山田・岡本(2008)で、対人関係の在り方の特徴にも見出されている。「関係性」優位群は、クラスタ分析の結果、「自律性」「見捨てられ不安」「自己定位」の因子得点が平均よりも高い(「見捨てられ不安」は、得点が高いほど見捨てられ不安を喚起されないと解釈される)様態であったが、面接調査の結果からは、むしろ他者の存在や他者との関係に敏感で、進路選択においては他者からの影響を受けていることが示された。「関係性」優位群の下位因子得点の高さは、他者との関係への敏感さと捉えた方が妥当である可能性が考えられる。また、全ての様態に見られたカテゴリーではあるが、「停滞」では、〈混乱〉に5名中3名が該当した。進路選択において、「あれもこれも」(対象者H)、「ぐちゃぐちゃに」(対象者K)なりやすいことが推測され、進路を選択していく上で核となる個の部分が揺らぎやすい可能性が考えられる。

進路選択過程を見ると(Figure 4)、入学当初「低自己関与」の状態にあり、「停滞」と「他者からの影響」を循環し、「他者からの影響」から「自己分析」に至るものの、「他者からの影響」が継続して存在し、「停滞」に戻ることが示唆された。「他者からの影響」が継続して、または繰り返し語られることから、「関係性」優位群の青年は、他者との関係に敏感であること、そしてそれにより、進路選択が「停滞」の状況に留まる傾向にあることが示唆された。

以上より、「関係性」優位群の青年は、進路選択の過程では、自己関与は低く、また他者からの影響も受けやすく、明確な進路決定までは至っていないことが推測された。

アイデンティティ様態「個」優位群の進路選択過程の語りの特徴 「個」優位群では、「停滞」、「自己分析」、「低自己関与」、「私の固執」、「他者からの影響」に6名中5名以上が該当した。全ての様態に見られた「停滞」、「自己分析」以外の、「個」優位群に特徴的であったカテゴリーについて考察する。

「低自己関与」には、6名全ての対象者が該当した。〈漠然とした将来展望〉に6名、〈コミットできない〉と〈合理的判断〉にそれぞれ3名が該当した。従って、「個」優位群の青年は、進路選択になかなかコミットできず、合理的思考により選択を進め、具体的に将来を展望することは難しいと推測される。「私の固執」には、6名中5名の対象者が該当した。「意見を言われても変えられない」(対象者O)、「あんまり外からの情報を取り込まず」(対象者N)など、他者からの影響性を否認し、反発することで、個を提示する在り方が示された。これに関して、「停滞」の〈決めるのが怖い〉に2名該当したことから、自分が決定するこ

とにより他の道が閉ざされてしまうことへの不安を持つと推測され、個を主張しつつも、決定する段階では足踏みしてしまう、偽りの個の提示とも言える「個」優位群の在り方も示唆された。「他者からの影響」では、「関係性」優位群、未熟群と比較して、〈流される〉の該当者が少なく、〈他者との比較による焦り〉に該当者が多かった。このことから、選択の内容ではなく進度において、他者の影響を受けやすいことが示唆された。

進路選択過程を見ると(Figure 5)、入学当初の「低自己関与」から「停滞」に移行し、その後「他者からの影響」と「自己分析」を循環し、「私の固執」に至ることが示唆された。「関係性」優位群に比べ、「他者からの影響」は一時的なものであり、影響を取り込むというよりは、上述したように、他者に反発することで個を提示し、「私の固執」に至ることが推測される。

以上より、「個」優位群の青年は、入学当初は進路選択に対して自己の関与は低いが、プロセスが進むにつれ、個を提示し始め、反発の形で他者からの分離を試み、個人としての在り方を守ろうとしていることが推測された。「関係性」優位群が関係に敏感であることが示唆されるのに対し、「個」優位群は、個へのこだわりが強いという特徴を持つことが示唆された。

アイデンティティ様態「未熟群」の進路選択過程の語りの特徴 未熟群では、「積極的な関与」、「停滞」、「自己分析」、「低自己関与」、「私の固執」、「他者からの影響」に6名中5名以上が該当した。全ての様態に見られた「停滞」、「自己分析」以外の、未熟群に特徴的であったカテゴリーについて考察する。

「積極的な関与」には、5名が該当し、入学当初に多く見られた。成熟群とは異なり、進路選択を経て再び「積極的な関与」に至ることは少ないと考えられる。〈決意〉はするものの、それが最終的な決定にはならず、プロセスが停滞することが示唆された。「低自己関与」には、6名全ての対象者が該当した。〈消極的選択〉と〈漠然とした将来展望〉にそれぞれ4名以上該当しており、進路選択に対し、関与は低く将来展望も曖昧な状態にあることが示された。「私の固執」では、〈親は頼らない〉に最も多く該当していた。「個」優位群と同様、他者、特に親からの影響を否認していることが示唆された。山田・岡本(2008)において、未熟群の特徴として“不安定な家族関係”が見出されており、進路選択においても、家族、特に親の存在は多様な意味で大きく、そのことに強く影響されていると考えられる。一方で、杉村(2001)では、多くの青年が、進路選択の過程で“両親の期待、欲求、圧力が頭わになった”と報告しており、親からの影響に対処できる

ようになることは、アイデンティティ発達において、重要な要素とも考えられる。「他者からの影響」では、＜他者との比較による焦り＞以外に該当者が見られなかった。上述したように、親からの影響を否認しつつも、一方では＜親に左右される＞に3名が該当しており、他者からの影響を受けやすいことが推測された。また、＜他者との比較による焦り＞の該当者がなかったことから、比較が可能なほど、他者と切り分けられた自己が意識されていない可能性も考えられる。なお、「主体性の重視」には該当者がおらず、研究1で示された未熟群の特徴である自尊感情の低さとの関連が示唆された。

進路選択過程を見ると (Figure 6)、入学当初の「積極的な関与」は、一方に「停滞」と「低自己関与」に向かい、「他者からの影響」を受けたり、「自己分析」を進めたりするものの、「私の固執」から「停滞」に戻ることが示された。現在も「停滞」の状態にある対象者が6名中3名存在したことから、未熟群の青年は、「停滞」状況から抜け出しにくいことが推測された。また、「個」優位群のように個を提示し、維持することは難しく、「関係性」優位群とともに、「停滞」の状態にある青年が多いことが推測される。

以上より、未熟群の青年は、入学当初のコミットした状態は続かず、関与が低い状態から、個の提示や自己分析を試みるものの、他者からの影響も多分に受け、停滞した状況から抜け出しにくいことが示唆された。

総合考察

本研究の成果

本研究では、山田・岡本(2008)と同様に、「個」と「関係性」の視点から青年を分類し、進路選択に関する語りから、それぞれの様態の特徴を明らかにすることを目的とした。

研究1のクラスタ分析の結果、「個」と「関係性」の視点から分類した4つの様態、成熟群、「関係性」優位群、「個」優位群、未熟群が得られた。この4様態に基づき行った研究2の語りの分析の結果、各様態で進路選択過程の相違が示唆された。成熟群は、他者信頼に支えられながら、進路選択に主体的に取り組み、確認という振り返りの作業まで至ることが示唆された。「関係性」優位群は、他者との関係に敏感で、他者に流されたり依存したりし、進路選択に対して、自己の関与は低い状態にあると考えられた。「個」優位群は、個へのこだわりが強く、他者の影響性を否認し、個を提示しようとするものが推察された。未熟群は、早期に停滞や関与の低い状態に移行し、他者からの影

響を受け、同時に、個の提示の試みも見られ、進路選択は混乱し停滞した状態であることが示唆された。また、成熟群と未熟群においては、研究1で見られた数量的な特徴と類似した傾向が認められた。

以上のように、4様態の相違が認められたことは、「個」と「関係性」の観点から青年期のアイデンティティを理解することの有用性を支持すると考えられる。

今後の課題

まず、研究2で対象者に偏りがあったことが課題として挙げられる。面接調査の依頼に応じた23名のうち、19名が女性であった。従って、本研究の結果は、性差を反映している可能性がある。また、男女比のみならず、各様態の人数が5、6名と少なく、結果の一般化にも課題が残った。さらに、面接調査への協力に応じたという点で、すでに対象者の一定の傾向が認められることが考えられる。今後は、対象者数を増やして、性別や他の要因をできるだけ統制し、検討を重ねることが必要と考えられる。

次に、研究2で用いた質的分析の方法についても、多くの課題が残された。本研究で得られたカテゴリーやプロセス図は、上述の対象者の偏りの問題も含め、仮説モデルに止まる。モデルの妥当性と信頼性を繰り返し確認し、より普遍的なものにしていく必要がある。

近年、質的研究の手法が確立されつつあるが、本研究で取り上げたような、対象者の心理状態、つまり対象者に“内在する意味”(大谷・無藤・サトウ, 2005)を質的データから取り出す研究方法は、未だ確立されていない。しかし、こうした視点に立つ研究から得られた知見は、心理臨床の場とも直結しやすく、直接的な援助や教育の場への応用可能性が高まると考えられる。今後も、研究の目的に即して、質的データを分析する適切な方法を選択すること、またその方法の確立を目指すことが求められる。

最後に、本研究では、研究2の結果から、「個」優位群は、個を提示する在り方が特徴的であること、「関係性」優位群は対人関係に敏感であり、影響を受けやすいことが示唆された。この点は、山田・岡本(2008)も含め、アイデンティティを捉える「個」と「関係性」の視点自体の理解に関連すると考えられる。本研究の結果からは、アイデンティティへの取り組み方、つまり、個人内で取り組む在り方と関係の中で取り組む在り方の相違が、「個」と「関係性」に反映されている可能性が示唆されており、今後も数量的研究と質的研究の両面から、検討を重ねることが必要である。

【引用文献】

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 仁科弥生(訳) (1977). 幼児期と社会 I みすず書房)
- Erikson, E. H. (1967). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 岩瀬庸理(訳) (1982). アイデンティティー青年と危機— 金沢文庫)
- Franz, C. E., & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224-256.
- Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge MA: Harvard University Press.
(ギリガン, C. 岩男寿美子(監訳) (1986). もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティー— 川島書店)
- Grotevant, H. D., Thorbecke, W., & Meyer, M. L. (1982). An extension of Marcia's identity status interview into the interpersonal domain. *Journal of Youth and Adolescence*, 11, 33-47.
- Hodgson, J. W., & Fisher, J. L. (1979). Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.
- Josselson, R. L. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- 川島大輔 (2008). 老年期にある浄土真宗僧侶のライフストーリーにみる死の意味づけ— 質的心理学研究, 7, 157-180.
- 小嶋由香 (2004). 脊椎損傷者の障害受容過程—受傷時の発達段階との関連から— 心理臨床学研究, 22, 417-428.
- 前盛ひとみ・岡本祐子 (2008). 重症心身障害児の母親における障害受容過程と子どもの死に対する捉え方との関連—母子分離の視点から— 心理臨床学研究, 26, 171-183.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 岡本祐子 (1994). 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究— 風間書房
- 岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達
の心理学—成人期・老年期の心の発達と共に生きる
ことの意味— ナカニシヤ出版
- 岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開— ミネルヴァ書房
- 小此木啓吾 (2002). 現代の精神分析—フロイトからフロイト以後へ— 講談社
- 大谷尚・無藤隆・サトウタツヤ (2005). 質的心理学が切り開く地平—日本質的心理学会設立集会「シンポジウム」— 質的心理学研究, 4, 16-38.
- 西條剛央 (2004). 構造構成的質的心理学の理論的射程—やまだ (2002) と菅村 (2003) の提言を踏まえて— 質的心理学研究, 3, 173-179.
- 清水秀美・今栄国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成— 教育心理学研究, 29, 348-353.
- 杉村和美 (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求—2年間の変化とその要因— 発達心理学研究, 12, 87-98.
- 高橋裕行 (1988). 同一性と親密性の危機の解決における性差—自我同一性地位の Rasmussen の EIS による併存的妥当性の検討— 教育心理学研究, 36, 210-219.
- 鏑幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (編著) (1995a). アイデンティティ研究の展望Ⅱ— ナカニシヤ出版
- 鏑幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (編著) (1995b). アイデンティティ研究の展望Ⅲ— ナカニシヤ出版
- 鏑幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (編著) (1997). アイデンティティ研究の展望Ⅳ— ナカニシヤ出版
- 鏑幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (編著) (1998). アイデンティティ研究の展望Ⅴ-1— ナカニシヤ出版
- 鏑幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (編著) (1999). アイデンティティ研究の展望Ⅴ-2— ナカニシヤ出版
- 鏑幹八郎・岡本祐子・宮下一博 (編著) (2002). アイデンティティ研究の展望Ⅵ— ナカニシヤ出版
- 山田みき・岡本祐子 (2008). 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティー対人関係の特徴の分析— 発達心理学研究, 19, 108-120.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造— 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 若松養亮 (1991). 大学生の進路選択過程における能力・適性の判断について— 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 471-472.
- 渡邊照美・岡本祐子 (2006). 身近な他者との死別を通じた人格的発達—がんで近親者を亡くされた方への面接調査から— 質的心理学研究, 5, 99-120.